『名人伝』論
——その寓意性について

The Thinking on the *Meijinden*
——About the Implied Meaning

郭　　玲　玲*

Lingling Guo

（摘要）

中島敦的《名人傳》是其生前正式發表的最後一篇小說。小說主人公紀昌從一個默默無名之輩最後成了射箭的“名人”，對他的解讀一直都是肯定性的看法，認為其成了真正的名人。在文本解讀中，筆者發現首先承認紀昌為“名人”的是其老師飛衛，那麼飛衛承認弟子紀昌為“名人”的目的則是考察的關鍵所在。本稿擬從新的原典考察入手，以飛衛的形象分析為切入點，解讀飛衛的心裡活動，以及承認弟子紀昌成為“名人”的背後原因。此外，從紀昌這一人物本身出發，參照甘蠅分析其外貌變化，並對飛衛，甘蠅和朋友對紀昌的稱呼發生的變化進行考察，論證紀昌這一“名人”形象的可靠性，以期解讀作者中島敦對紀昌這一“名人”形象的創作意圖。

一　序文

『名人伝』は中島敦の生前に発表された最後の作品であり、これまで主として、出典との比較、紀昌の「名人像」、中島の創作意図という三つの側面から論じられてきた。

例えば福永武彦[1]および佐々木充[2]らは、中島が取材の中核とした『列子』の原文を挙げ、いくつかのストーリーを編纂した中島の力を評価した。しかしながら彼等は『孟子』などからの引用及びその裏にある寓意についての論究は行っていない。そこで本稿では従来指摘されていない新しい典拠を指摘しつつ、こうした典拠を用いることによって中島がどのように「名人」紀昌を創造したかを改めて考察してみたい。また勝又浩[3]、濱川勝彦[4]らは『名人伝』は紀昌が名人になる物語と考えたが、これに対して木村一信は疑念を抱いた。本稿では紀昌の顔付きの変化の描写や、飛衛・甘蠅・知人からの呼称の変化を通じて『名人伝』の主旨が果たして紀昌の名人像を描くことにあったのかどうかを検証したい。さらに先行研究では作者の創作意図が道教の「真人」「無為」などにあるといわれるが[5]、筆者はその点について疑念を抱いている。

本論では従来の研究方法を検証することを通じて『名人伝』の主旨を明らかにしたいと考える。

二　先行研究と問題提起

中島敦は生前に「文学界」昭和十七年二月

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程（The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University）

Journal of East Asian Studies, No.11, 2013.3. (pp.167-179)

号に「古譚」という名前で『山月記』と『文字禍』、五月号に『光と風と夢』、「文庫」（三笠書房）十二月号に『名人伝』という四篇を発表した。先行研究においてこれらの作品の出典を考察したものに以下の研究があり、筆者はそれぞれに対して問題提起を行いたい。

1　福永武彦（1959）

主な出典とされる『列子』「湯問篇」・「黄帝篇」・「仲尼篇」を列挙しながら、「それらがすべて紀昌の行為とされて、彼の弓の巧みさ、その名人芸の至れるさまを強調するのに用いられている」[6]と述べ、原典の物語の役割を強調した。そして作者中島敦の創作意図について、「内容的には老荘のいわゆる至人の姿を描こうとしたのであるが、このようなとらえにくい内容を具体化するためには、やはり寓話としての体を取らなければならなかったのである」[7]と述べ、紀昌を老荘の至人・真人の典型とした。筆者は福永の「古典作品中に存在する寓意を秘めたる話として、これを読者に紹介しようとしている」[8]という解釈には賛同するが、福永は中島の寓意については理解していないように思われる。

2　佐々木充（1965）

『列子』のほかに『荘子』『戦国策』からの引用も指摘した。「（中島敦の）加筆は、原典の文章を基本線から大きく逸脱せずに細部を補強して、その特殊世界に相応しい現実化をはかるものだけである」と解釈し[9]、師を殺害しようとした後の飛衛と紀昌についての心理描写については、「『列子』から「名人伝」が独立しだす地点を示す」と分析し[10]、「ばらばらの話を、首尾を一貫した己の作品として、つまり、完成された個体として成立させるためには、何としても己の世界を構築する強力な意志がなければならない」と作者の意志の強さを指摘した[11]。佐々木は作品のテーマについて次のように述べる。

> 「名人伝」は神仙譚的・寓話的・衣裳をまとって、そうした「飛躍の世界」を窺うものであるが、果たして、「なった」世界――つまり、弓を忘れ果てた弓の大名人の世界が、「人間」の世界として、本当に究極的安寧の世界か否か、それは依然として残された問題である。がともかくも、中島の希求は、こうした境に至り着いたのである。[12]

しかしながら佐々木は中島の寓意について言及しておらず、この解釈は正しいとは言い難い。

このほかに山敷和男[13]・大野正博[14]の研究があるが、ほとんど福永・佐々木の原典比較を凌駕するものではない。このように従来の先行研究では原典を指摘してはいるが、中島がそれらを引用するに当たって寓意を加えている点については言及しておらず、また原典の指摘も十分ではないところに欠陥を見いだす。

次に『名人伝』の主題について、先行研究では紀昌が甘蝿を超え、射の世界の名人の境地に至ったと解釈する研究が殆どである[15]。木村瑞夫も似たような解釈をしており、下山した時の紀昌の「何の表情もない、木偶の如く愚者の如き容貌」と甘蝿の「羊のような柔和な目」を比較して、「作者は甘蝿の『不射之射』を超えた紀昌を作り上げたのである」と述べているが[16]、「その後『形』を放棄することによって精神を喪失し、名人ではなくなってしまう。（中略）紀昌は名人にはなったが、名人であり続けることはできなかった」[17]とほかの研究者とはやや異なる解釈を行っている。木村一信も最後の部分について

次のように述べている。[18]

> 紀昌をして「名人」たらしめる証拠はついに公開されないままなのである。その代り、飛衛の「感嘆」や紀昌の思わせぶりな言葉、一商人や盗賊などによる「様々な噂」によってのみ、彼は「名人紀昌」として存在するばかりである。[19]

なお紀昌の名人像について木村一信は次のように述べている。

> 作者は「志を立て」た男の目標へ向かって邁進する様を描き、執着の極みは「無為」という自己放下にあるという結論を思わせつつ、一方では、明確にそこに見られる実体のない、不在感、虚無感を訴えようとしているのではないか。[20]

ただ果たして作者は「無為」を目指す紀昌を描き出したのであろうか。筆者はこの作品は寓話であり、寓意が込められているように思う。本論ではこうした筆者の考えを明らかにしたい。

三　原典との比較

田鍋幸信「中島敦蔵書目録」よると[21]、中島は諸子百家を耽読していたことがわかり、諸子百家の作品を引用していることも決して不思議ではない。本章では『名人伝』に引用された『列子』をはじめとする典籍について考察したい。

1　第二段[22]——弟子が師を殺す

『名人伝』によれば、紀昌を「名人」として初めて認めたのは師飛衛とされている。飛衛は「百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中するという達人」であり、彼が紀昌を評価したことによって、紀昌の「名人」としての名声は一気に世間に広まった。換言すれば、紀昌を天下の「名人」にしたのは飛衛である。ここでは紀昌の「名人たるゆえん」を知るために、飛衛とはどんな人物なのか、なぜ紀昌を「名人」と認めたのか、その根拠は何だったか、について考察したい。

飛衛は紀昌が「天下の弓の名人」になろうという志を立てた後、「己の師と頼むべき人物を物色する」（『名人伝』）時に登場した。紀昌を弟子として受け入れた後の飛衛は紀昌に五年間の目の基礎訓練を受けさせ、二ヶ月間の奥儀伝授を課して、教える時には、命令を出すほかに弟子の進歩についてたまに讃辞を出した。『名人伝』の第一段では、飛衛は紀昌の志を達成させるために登場したと言える。五年二ヶ月で「もはや師から学び取るべき何ものも無くなった」（『名人伝』）と気づいた紀昌は、もしこのまま飛衛に従えば、自分の「天下の弓の名人」の志の達成する日はまだ遠い、師飛衛は単なる「名手・達人」であって「名人」ではない、名人になるには彼を超えなければならない、しかし今の段階では超えることができないと考えた。途方に暮れた紀昌は「ある日、ふと良からぬ考えを起し」（『名人伝』）、師飛衛を殺そうとするが、殺すことに失敗する。『名人伝』ではその時の紀昌と飛衛の気持ちを以下のように描いている。

> ついに非望の遂げられないことを悟った紀昌の心に、成功したならば決して生じなかったに違いない道義的慚愧の念が、この時忽焉として湧起った。飛衛の方では、また、危機を脱し得た安堵と己が伎倆についての満足とが、敵に対する憎しみをすっかり忘れさせた。二人は互

いに駈寄ると、野原の真中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた。(中略)

涙にくれて相擁しながらも、再び弟子がかかる企みを抱くようなことがあっては甚だ危いと思った飛衛は、紀昌に新たな目標を与えてその気を転ずるにしくはないと考えた。彼はこの危険な弟子に向って言った。もはや、伝うべきほどのことはことごとく伝えた。爾がもしこれ以上この道の蘊奥を極めたいと望むならば、ゆいて西の方太行の嶮に攀じ、霍山の頂を極めよ。そこには甘蠅老師とて古今を曠しゅうする斯道の大家がおられるはず。老師の技に比べれば、我々の射のごときはほとんど児戯に類する。爾の師と頼むべきは、今は甘蠅師の外にあるまいと。

ここでは飛衛の心理を重点的に描いており、この弟子は自分にとって既に甚だ危ない存在になっており、なんとかしなければと自分自身の保身を考えた。

ここで注意すべきは、飛衛の言葉づかいである。弟子の注意を自分自身から逸らすため、自分の安全を確保するために、この弟子の気を転ずる方法を考え、自分の教えることはもう尽きたと言って故意に“謙虚”さを示して弟子の技量を認めるふりをしている。

飛衛の心理描写を見ると、飛衛は弟子より自分のことを優先する師であり、目的を達するには相手の関心をうまく利用する人物である。作者がこのように計略をよく用い、深謀にたけた飛衛という人物を登場させた目的は一体何であろうか。それは紀昌が甘蠅老師の許を離れ、下山した後のシーンを見れば明瞭である。

九年たって山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付の変ったのに驚いた。以前の負けず嫌いな精悍な面魂はどこかに影をひそめ、なんの表情も無い、木偶のごとく愚者のごとき容貌に変っている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はこの顔付を一見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕のごとき、足下にも及ぶものでないと。

飛衛が紀昌を「天下の名人」と評価した根拠は、「なんの表情も無い、木偶のごとく愚者のごとき容貌」だけである。実技の射術ではなく、無関係と思われる顔付きで判断したことは如何に早計であろうか。

前述のように飛衛の評価の裏には、もし無視すればまた狙われる、実力は分らないが弟子の求める名誉、「天下の弓の名人」をとにかく授けよう、という心理が窺える。そう考えると、飛衛によって作り上げられた紀昌の「名人像」は徹底的に飛衛自身の都合でできたものだと言える。そして中島敦が造形した深謀をめぐらす飛衛という人物の役割も分かってくる。ここで作者は飛衛に評価された「名人」が如何に疑わしいものであるかということを明示している。

ところで、作者が飛衛という人物を造形する時、『孟子』「離婁章句下」の記事を典拠としたのではないかと推測される。

逢蒙学射於羿，尽羿之道，思天下惟羿為愈己，於是殺羿。孟子曰：「是亦羿有罪焉。」公明儀曰:「宜若無罪焉。」曰:「薄乎云爾，悪得無罪？鄭人使子濯孺子侵衛，衛使庾公之斯追之。子濯孺子曰：『今日我疾作，不可以執弓，吾死矣夫！』問其僕曰：『追我者誰也？』其僕曰：『庾公之

斯也。』曰：『吾生矣。』其僕曰：『庾公之斯，衛之善射者也，夫子曰吾生，何謂也？』曰：『庾公之斯學射於尹公之他，尹公之他學射於我。夫尹公之他，端人也，其取友必端矣。』庾公之斯至，曰：『夫子何為不執弓？』曰：『今日我疾作，不可以執弓。』曰：『小人學射於尹公之他，尹公之他學射於夫子。我不忍以夫子之道反害夫子。雖然，今日之事，君事也，我不敢廢。』抽矢扣輪，去其金，發乘矢而後反。」

和訳[23]：

逢蒙は羿（中国古代の弓の名人）に射を学び、師羿の技を学び尽した後、「天下では己に勝る人はただ羿だけだと思い、羿を殺した。孟子が「これはまた羿にも誤りがある」というと、公明儀は「誤りがないようですが」と言った。孟子は語った、「わずかだがある。全く誤りがないといえるものか。鄭国は子濯孺子を衛国に侵入させ、衛国は庾公之斯に彼を追わせた。子濯孺子が『今日は疾を患い、弓を執ることができない。死ぬだろう』と言った後、家僕に『私を追っている者は誰なのか』と聞いた。彼の家僕が『庾公之斯です』と答えると、『私は生きる』と言った。しかし、彼の家僕が『庾公之斯は衛国の射の善くできる者です。先生が私は生きると言われたのは、なぜですか？』と子濯孺子に聞くと、『庾公之斯は尹公之他に射を学び、尹公之他は私に射を学んだ。尹公之他は端正な人であるから、彼が選んだ友も必ず端正である』と子濯孺子が答えた。庾公之斯が追って来て、『先生は何故弓を取らないのですか？』と子濯孺子に聞くと、『今日は私が疾を患い、弓を執ることができない』と子濯孺子が答えた。そうすると、庾公之斯は『私は尹公之他に射を学び、尹公之他は先生に射を学んだ。先生の道で先生を害するに忍びない。しかし、今日の事は、国君の命令なので、やめられない』と言って、矢を抽き、車輪で叩き、その金（矢じり）を取り外し、四本発してから引き揚げた。」

『孟子』の論を用いれば射は学んだ者だけでなく、教える側にも誤りがあることになる。もし、紀昌を教えた飛衛が子濯孺子のように性格が端正な弟子を育てていれば、弟子に命をねらわれるまでには至らなかっただろう。甘蝿老師の許に紀昌を送った飛衛は自分の身の安全を考え、「再び弟子がかかる企みを抱くようなことがあっては甚だ危いと」思ったため、「紀昌に新たな目標を与えてその気を転ずるにしくはないと考えた。」これは端正な人間を育てた子濯孺子とは対照的である。

2　第四段

2.1　紀昌の「名人像」

紀昌が甘蝿の許に留まった九年間にどのような修行をしたかについて、『名人伝』では特に記載していない。下山した後の紀昌についての話は定説では中島の創作とされる[24]。確かに話の粗筋は中島敦の創作であるが、その中におけるいくつかの言葉や、場面などには出典があると考えられる。以下にその典拠を指摘しながら、原典の意味と中島の引用の意図を探りたい。

まず、紀昌は下山した後、人から「弓さえ絶えて手に取ろうとしない」訳を尋ねられ、「至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなし」と答えた。この回答は『列子』「黄帝篇」・「説符篇」を典拠とすると考えられる。

○海上之人有好漚鳥者，每旦之海上，從

漚鳥游, 漚鳥之至者百住而不止。其父曰:「吾聞漚鳥皆從汝游, 汝取來, 吾玩之。」明日之海上, 漚鳥舞而不下也。故曰:至言去言, 至為無為;齊智之所知, 則浅矣。

和訳:

海辺に住む人の中に鴎の好きな者がいて、毎朝海辺で鴎に従って遊んでいたが、飛んでくる鴎は百以上もいた。彼の父が「鴎が皆おまえに従って遊ぶと聞いた。私は玩んでみたいので、取ってきてくれ」と言った。翌日、彼は海辺に行ったが、鴎は舞っているが下りてこなかった。「至言は言を去り、至為は無為である。齊智の知るところは則ち浅い」と言われるとおりである。

○白公問孔子曰:「人可與微言乎?」孔子不應。白公問曰:「若以石投水何如?」孔子曰:「吳之善沒者能取之。」曰:「若以水投水何如?」孔子曰:「淄、澠之合, 易牙嘗而知之。」白公曰:「人故不可與微言乎?」孔子曰:「何為不可?唯知言之謂者乎!夫知言之謂者, 不以言言也。爭魚者濡, 逐獸者趨, 非樂之也。故至言去言, 至為无為。夫淺知之所爭者, 末矣。」白公不得已, 遂死於浴室。

和訳:

白公が孔子に「人に微言をすることができるのか」と聞いたが、孔子は応えなかった。白公が「もし石を水に投げれば、(その結果は) 如何でしょうか」と聞くと、孔子は「呉国の潜水が善くできる者は之を取れる」と答えた。「もし水を水に投げれば、いかがでしょうか」と聞いたら、孔子は「淄と澠 (河の名) を混ぜても、易牙が嘗めて分けられる」と言った。白公が「だから、人と微言できないのか」と聞くと、孔子は「何故できないことがあろうか。唯、言葉の意味を知る者だけができる。言葉の意味を知る者には言葉で言わなくてもいい。魚を争う者が濡れ、獣を逐う者が速く歩くのは、楽しんでするわけではない。故に至言は言を去り、至為は無為である。浅知者の争うところは則ち末である」と答えた。白公は (孔子の意味を) 理解できずに、遂に浴室で死んだ。

以上の二か所の内容から見れば、「至為は為す無く、至言は言を去り」という紀昌の返答の一部分は『列子』からの引用であると考えられる。

佐々木は「『至射無射』という語が『列子』に見いだせないのは中島がこの物語に相応しく作り出したものであろう」[25]と指摘していたが、この言葉の意味についての解読はされていない。「至射は射ることなし」という言葉は、『列子』の「至言去言、至為無為」に導かれていることは上述のごとく明らかである。しかしながら、紀昌の言った「無射」ははたして原典の「無為」と同じ境地であるか。

ここで「無為」の境地とは一体どのような境地であるのか考えてみたい。そこでまず、老子の説いた「無為」の意味を見よう。老子の『道徳経』においては、「無為」について説かれた箇所は全部で9章あり、その4章において身を修める意味を示している。

○天下皆知美之為美, 斯惡已。皆知善之為善, 斯不善已。故有無相生, 難易相成, 長短相較, 高下相傾, 音聲相和, 前後相隨。是以聖人處無為之事, 行不言之教。(『道徳経』第2章、以下は章名だけを記す)

和訳:

天下は美が美であることを皆知ることこそ、悪いのである。善が善であること

を知ることこそ、善くないのである。有と無が生み合い、難と易が成し合い、長と短が較べ合い、高と下が傾きあい、音と声が相和し、前と後が随い合うと言われる。だから、聖人は無為の事を処し、不言の教えを行うのである。

○上德不德，是以有德；下德不失德，是以無德。上德無為而無以為；下德為之而有以為。(38章)
和訳：
上德の人は意識的に德をしないため、德がある。下德の人は意識的に德を失わないようにしているため、德がない。上德の人は、無為であって、德を行ったと意識していない。下德の人は（德を行って)、德を行ったと意識している。

○天下之至柔，馳騁天下之至堅。無有入無間，吾是以知無為之有益。不言之教，無為之益，天下希及之。(43章)
和訳：
天下の至柔は、天下の至堅の中に入って馳せている。私は無形のものが隙間ないものに入ることがあるため、無為の有益を知る。言わざることの教えと、無為の益というものに天下で及ぶ者は希である。

○為學日益，為道日損。損之又損，以至於無為。無為而無不為。取天下常以無事，及其有事，不足以取天下。(48章)
和訳：
学を為すと日ごとに(知識が)益し、(自然の）道を為すと日ごとに（雑念が）損ずる。損じていくと、無為に至る。無為は為さないことがない。天下を取るには常に無事ですることである。何か起こるようになったら、天下を取るには足らない。

老子を始めとする道家の思想では「道」という概念がよく指摘されている。「老子の所謂道は天地万物の自ら成り自ら生ずる所以の道にして、即ち自然也。」[26]無為は自然に従う態度で、全てを捨てて何もしないこととは全く違う境地である。紀昌は「無為」を「射ることなし」と読み取り、最後は射ることどころか、その道具、弓の名も忘れてしまったのであり、「無為」の境地に達したとは考えられない。

3.2 「名人たるゆえん」

「名人」という言葉は作品の中で十五箇所あり、第一段は一箇所、第三段は一箇所のみであるが、第四段に十三箇所も現れている。従って、この部分は作者中島敦が作った紀昌の「名人像」を解読するための大きな手がかりになる。まず、中島敦と見られる「寓話作者」のことをみよう。

> もちろん、寓話作者としてはここで老名人に掉尾の大活躍をさせて、名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたいのは山々ながら、一方、また、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。

この記述から見れば、名人紀昌の下山した物語は「寓話作者」＝中島敦が意図して作り上げたことがわかる。掉尾の大活躍とは、師飛衛に認められ、「天下の名人」と称賛してもらったことと、「至極物分かりのいい邯鄲の都人士」がこの弓を執らざる弓の名人を誇とし、「紀昌が弓に触れなければ触れない程、彼の無敵の評判は愈々喧伝された」ことであ

る。しかし、作者の本意は「名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたい」のであり、しかもその気持ちは山々である。しかし、そのゆえんはこの物語を作る人としての作者にはわかるはずであるが、明かさなかった。なぜ文末では「名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたい」気持ちを書いたのか。作者の意図は何であるのか。これらの疑問に対して作者はその所以を明かす代わりに、以下の逸話を作りだした。

> その話というのは、彼の死ぬ一二年前のことらしい。ある日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行ったところ、その家で一つの器具を見た。確かに見憶えのある道具だが、どうしてもその名前が思出せぬし、その用途も思い当らない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと。主人は、客が冗談を言っているとのみ思って、ニヤリととぼけた笑い方をした。老紀昌は真剣になって再び尋ねる。それでも相手は曖昧な笑を浮べて、客の心をはかりかねた様子である。三度紀昌が真面目な顔をして同じ問を繰返した時、始めて主人の顔に驚愕の色が現れた。彼は客の眼を凝乎と見詰める。相手が冗談を言っているのでもなく、気が狂っているのでもなく、また自分が聞き違えをしているのでもないことを確かめると、彼はほとんど恐怖に近い狼狽を示して、吃りながら叫んだ。
>
> 「ああ、夫子が、——古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？ああ、弓という名も、その使い途も！」

この逸話を見ると、「名人」紀昌は、最後に弓の名も、その使い途も忘れ果てた。しかし、もう一人の「老名人」甘蝿老師は、弓などの道具を使わずに「不射之射」をしていても、弓の名や、その使い途が分っているのである。この二人の「名人」は弓に対して正反対な表現を示していることが歴然である。もし、甘蝿老師が弓の「名人」であるなら、紀昌の「名人」は何であるか。紀昌の「名人」の正体を考察するために、紀昌自身の変化と他人から紀昌に対する呼称の変化に着目したい。

四 「名人」の正体

1 精悍から木偶へ

人の容貌や顔の表情に対する描写は中島敦の作品によくみられる。『カメレオン日記』の吉田は行動者の代表として、「精力絶倫で、疲れる事を知らぬ働き手、常に勇気凛凛たる偏見に充ち満ちて、あらゆる事に勇往邁進する男である」。『弟子』の子路はもともと遊俠であり、孔子の目には「血色のいい・眉の太い・眼のはっきりした・見るからに精悍そうな青年の顔」をしている。『わが西遊記』の悟空も「疲れを知らぬ肉体が歓び・たけり・汗ばみ・跳ねている・その圧倒的な力量感。如何なる困難をも欣んで迎える強靭な精神力の汪溢」という「火種」のような存在である。行動者の造形はほとんどこういう精悍そうな恰好をしているようである。

『名人伝』においては紀昌の顔の表情の変化が更に著しい。以前は「負けず嫌いな精悍な面魂」で、天下第一の弓の名人になろうとする気負いがすぐ窺えた。つまり、以前の紀昌は行動者の一人で、訳なんかは何も考えずに、ただ衝動的なタイプであった。しかし、甘蝿に従って九年間の修業を終えてからは、その精悍な顔付きが「影をひそめ、なんの表

情も無い、木偶のごとく愚者のごとき容貌に変っている。」このような顔付きで飛衛を訪ねた時、飛衛は「一見すると感嘆して」叫び、紀昌を「名人」と評価した。つまり、飛衛にとってはこのような顔付きは名人たるべきもの、普通の自分のようなものは比べ物にならないのである。ここでは「名人」になるかどうかの判断基準は顔付きのみである。射のことは無視されてしまっている。ここにおける中島敦の描写には嘲笑の意味合いが読み取れる。さらに、老いた名人紀昌は、「ますます枯淡虚静の域にはいって行ったようである。木偶のごとき顔は更に表情を失い、語ることも稀となり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至った」。彼自身の言葉で解釈すると、「既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳のごとく、耳は鼻のごとく、鼻は口のごとく思われる」。

この表情の変化は、甘蝿老師についての描写と対照的である。

> 気負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかし酷くよぼよぼの爺さんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲っているせいもあって、白髯は歩く時も地に引きずっている。

弓の大家甘蝿は「羊のような柔和な目」をしている。それに対して、紀昌は「精悍な面魂」から木偶の如き顔に、さらに「眼は耳の如く、耳は鼻の如く、鼻は口の如く」へと、顔付きを失ってしまったかに見える。

2 「無名」から「夫子」へ

2.1 「無名」な紀昌

第一段において、飛衛が自分について芸を学んでいた紀昌に対する言葉遣いを見てみよう。

○飛衛は新入の門人に、先ず瞬きせざることを学べと命じた。

○それを聞いて飛衛が言う。瞬かざるのみではまだ射を授けるに足りぬ。次には、視ることを学べ。視ることに熟して、さて、小を視ること大のごとく、微を見ること著のごとくなったならば、来って我に告げるがよいと。

○飛衛は高踏して胸を打ち、初めて「出かしたぞ」と褒めた。

○傍で見ていた師の飛衛も思わず「善し！」と言った。

飛衛は紀昌に弓の技術を教えたとき、最初は命令で、自分のことを「我」と称し、弟子紀昌のことに対する呼称が何もなく、その上達したことについても「出かしたぞ」、「善し！」と簡単に褒めている。紀昌に対する飛衛の傲慢さがわかる。

2.2 「爾」

第二段で、紀昌は師飛衛を殺そうとしたが、失敗した。この弟子が「危険」な存在だと感じ、再び「斯かる企みを抱くようなことがあっては甚だ危ないと思った」飛衛は更に新しい目標をつけないと、と考えて、初めて弟子のことを「爾」と呼んだ。

> 爾がもしこれ以上この道の蘊奥を極めたいと望むならば、ゆいて西の方大行の嶮に攀じ、霍山の頂を極めよ。そこには甘蝿老師とて古今を曠しゅうする斯道の大家がおられるはず。老師の技に比べれば、我々の射のごときはほとんど児戯に類する。爾の師と頼むべきは、今は甘蝿師の外にあるまいと。

「爾」は対等以下の人、又は対等の人に対する呼称である。弟子の技を感心しつつも、弟子の危険さを感じた飛衛は、この弟子の存在はとんでもないものになると考え、「爾」と呼びはじめ、紀昌を自分の水準に達したと認めざるを得なかったのだろう。

2.3 「好漢」

飛衛の教えによって甘蠅を訪ねてきた紀昌は、来意を告げ、己の技の程を見せたくて相手の返事を待たずに甘蠅老師の前で射術を披露し、一箭で五羽の大鳥を落とした。甘蠅は紀昌の披露した射術を見て「好漢」と呼んだ。

> 一通り出来るようじゃな、と老人が穏かな微笑を含んで言う。だが、それは所詮射之射というもの、好漢未だ不射之射を知らぬと見える。

これは紀昌に対するある程度の肯定でもあれば、どこか足りないところを示していることを裏付けている。「好漢」という呼称には勇猛という意味合いがある。今の紀昌は「好漢」の段階に至ったが甘蠅から見れば、「射之射」だけわかり、「不射之射」、つまり、それ以上の境地にはまだ到達していない。

2.4 「我儕」と「足下」

甘蠅のもとを離れ、下山した昔の弟子に対して、飛衛は「天下の名人」と認めた。

> この顔付きを一見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕のごとき、足下にも及ぶものでないと。

ここで紀昌に対する呼称は著しく変わった。顔付きで弟子の“境地”を認め、自分を「我儕」と称し、弟子を「足下」という敬称を使った。弟子の顔付きのみで、自分のことを卑下し、弟子のことを直ぐに「天下の名人」と称賛したのは軽率であり、意図的であろう。故意に敬称を使い、相手を尊敬し、もう天下の名人になったのだ、おれは比べ物にならないよと、紀昌に殺される危機にもう一度落ちないように保身を考えているとしか思われない。

2.5 「夫子」

老いていくこの「名人」は死ぬ一二年前、知人の許に招かれたことがある。その家の主人に弓を指して「それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと」聞いた。三度も聞いた後、知人は「ほとんど恐怖に近い狼狽を示して、吃りながら叫んだ。」

> ああ、夫子が、――古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？　ああ、弓という名も、その使い途も！

ここに至って紀昌は「夫子」として尊敬された。この呼称には二重の意味がある。「夫子」はもともと男子の通称で、春秋時代になると、太子・大夫・先生・長者を呼ぶ尊称になった。孔門の弟子が専ら孔子を称してから、後世、師の専称となる。

『墨子』「公輸」と『孟子』「離婁章句下」の例を引用する。

> ○公輸盤為楚造雲梯之械、成，将以攻宋。墨子聞之，起於魯，行十日十夜，而至於郢，見公輸盤。公輸盤曰：“夫子何命焉為？”
> 和訳：
> 公輸盤は楚国のために雲梯という機械を造り、出来上がった。（楚国は）それで宋国を攻めようとする。墨子はそのこ

とを聞いて魯国から出発し、十日間十晩かけて郢（楚の都）に着き、公輸盤に会った。公輸盤は墨子に「先生、何のご命令がありましょうか？」と聞いた。

○小人學射於尹公之他，尹公之他學射於夫子。我不忍以夫子之道反害夫子。
和訳：
私は尹公之他に射を学び、尹公之他は先生に射を学んだので、先生の道で先生を害するに忍びない。

『名人伝』の叙述を見ると、老いた紀昌を尊敬する意味合いもあり、「古今無双の射の名人たる夫子」は射によって名誉を得、尊敬されている。しかし、この「夫子」は射の道具――弓を、弓の名前も、弓の使い途も忘れ果てた。「夫子」として本来は人に弓の使い方など、何かを教える師匠のことであるが、「夫子」紀昌は教える内容の道具の名前も、その使い途も忘れ果てた。紀昌に対するこの「夫子」の使い方には先生として尊敬する意味を読み取るのが難しい。

よく似たな例は『弟子』にもある。

許から葉へと出る途すがら、子路が独り孔子の一行に遅れて畑中の路を歩いて行くと、蓧を荷った一人の老人に会った。子路が気軽に会釈して、夫子を見ざりしや、と問う。老人は立止って、「夫子、夫子と言ったとて、どれが一体汝のいう夫子やら俺に分る訳がないではないか」と突堅貪に答え、子路の人態をじろりと眺めてから、「見受けたところ、四体を労せず実事に従わず空理空論に日を暮らしている人らしいな。」と蔑むように笑う。それから傍の畑に入りこちらを見返りもせずにせっせと草を取り始めた。

『論語』の中で夫子は孔子のことを指す。しかし、ここでは老人は孔子のことを「四体を労せず実事に従わず空理空論に日を暮らしている人」と皮肉った。

「夫子」と呼ばれた紀昌のことを考えてみよう。紀昌は甘蠅の許を離れてから、弓も捨て、他人の尋問に対して「至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなし」と奥深そうに話した。その後も、彼は弓を手にすることなく、口にも射ることを出さなくなった。弓に関する事柄を忘れ果てた紀昌は、弓の名と使い途を忘れ果てただけでなく、弓を使う「射」もできないはずである。「射」ができない者を「夫子」と呼ぶのは理解し難い。

五　結論

『名人伝』は中島敦が古典に取材した小説で、構成が整備していると認められており、主人公紀昌が志を立てて、飛衛、甘蠅老師に従って技を学び、最後に二人の師匠を超えて、「天下の弓の名人」になったと解釈されている。筆者は中島敦が作品中に「寓話作者」と名乗っていることから、この作品を表面的に名人の一代記と解釈するのは間違っており、その寓話としての性格を考察すべきではないかと考えた。

そしてこれを検証するために、まず飛衛という人物に着目した。飛衛という人物は紀昌を「天下の名人」として最初に承認した人物であり、作品の寓意性を考える上では重要な人物であるが、従来の研究では彼についての考察がほとんどなされてこなかった。本稿では、『名人伝』の典拠として既に指摘された『列子』のほかに、新しい典拠として『孟子』「離婁章句下」を指摘し、飛衛の造形に潜んだ批判的な一面を明らかにした。

次に主人公「名人」紀昌自身に焦点をあて、彼の「至射は射ること無し」という言葉が『列子』の「至言去言、至為無為」にならって作り上げた言葉であるが、「無為」とは「自然に為す」という意味であり、紀昌の「射ること無し」が本来無為であるべき「至射」の境地には至っていないことを明らかにした。

また、紀昌の顔付きの変化及び飛衛・甘蠅老師・知人から受けた呼称に注目し、彼が最終的には甘蠅老師を超えていないことを指摘した。

以上のことから、本稿では『名人伝』は従来言われてきたような名人の一代記ではなく、寓意を込めた作品であると結論づけた。

[注]

[1] 福永武彦編、『近代文学鑑賞講座』18中島敦・梶井基次郎、角川書店、1959年4月1日八版発行、pp.50-57

[2] 佐々木充、「「名人伝」――中島敦・中国古典取材作品研究(三)――」、『帯広大谷短期大学紀要』、1965年3月15日、pp.29-46

[3] 勝又浩、a「作品と鑑賞――「名人伝」」、『Sprit 中島敦《作家と作品》』、有精堂、1984年7月20日、pp.134-145
b「『名人伝』について」、『中島敦の遍歴』、筑摩書房、2005年5月25日初版第二刷発行、pp.130-152

[4] 濱川勝彦、「「名人伝」」、『中島敦の作品研究』、明治書院、1976年9月10日、pp.255-264

[5] 大野正博、「「名人伝」考」、『中島敦全集』別巻、筑摩書房、2002年5月1日、pp.134-149

[6] 前掲注1書、p.52

[7] 前掲注1書、p.57

[8] 前掲注1書、p.50

[9] 前掲注2書、p.33

[10] 前掲注2書、p.34

[11] 前掲注2書、p.39

[12] 前掲注2書、p.44

[13] 山敷和男「中島敦の「名人伝」の世界」、『中国古典研究（15)』、中国古典研究会、1967年12月1日、pp.84-97

[14] 前掲注5書

[15] 表1参考

[16] 木村瑞夫「中島敦『名人伝』論――精神と形――」、『論攷　中島敦』、和泉書院、2003年9月24日、p.154

[17] 前掲注16書、p.163

[18] 木村一信「『名人傳』論――成立・＜志＞のゆくえ」、『中島敦論』、双文社、1986年2月22日、pp.149-167

[19] 前掲注17書、p.163

[20] 前掲注17書、p.165

[21] 田鍋幸信「中島敦蔵書目録」、『日本文学研究資料叢書』梶井基次郎・中島敦、有精堂、日本文学研究資料刊行会、1986年8月20日４版発行、pp.276-286

[22] 『名人伝』は一行あけて四段に分ける。

[23] 筆者訳。以下同。

[24] 前掲注2と注13書、佐々木充と山敷和男の論文参考。

[25] 前掲注2書、p.37

[26] 鶴田久作、「老子解題」、『國譯漢文大成　経子史部　第一輯』、国民文庫刊行会、共同印刷株式会社、1939年6月18日、p.1323

＊＜表１＞　先行研究リスト

執筆者	論文題名	所収書誌名	発行所	発行年月
福永武彦	「名人伝」鑑賞	近代文学鑑賞講座　第十八巻 中島敦　梶井基次郎	角川書店	1959.4
佐々木充	「名人伝」：中島敦・中国古典取材作品研究（三）	帯広大谷短期大学紀要	帯広大谷短期大学	1965.3
山敷和男	中島敦の「名人伝」の世界	中国古典研究	中国古典研究会	1967.12
濱川勝彦	「名人伝」	中島敦の作品研究	明治書院	1976.9
大野正博	「名人伝」考	中島敦全集　別巻	精興社	1976.10
勝又浩	作品と鑑賞――「名人伝」	Sprit中島敦《作家と作品》	有精堂	1984.7
	『名人伝』について	中島敦の遍歴	筑摩書房	2005.5
奥野政元	第十三章「名人伝」――中島的テーマの反措定	中島敦論考	桜楓社	19854
	補説「弟子」と「名人伝」	中島敦論考	桜楓社	1985.4
木村一信	『名人傳』論――成立・＜志＞のゆくえ	中島敦論	双文社	1986.2
宮田一生	中島敦「名人伝」論	関西学院大学日本文学会	日本文藝研究44	1992.4
山下真史	『名人伝』論	日本文学	日本文学協会	1994.12
藤村猛	「名人伝」――その意味するもの	中島敦研究	渓水社	1998.12
新井通郎	中島敦『名人伝』の構造	二松学舎大学人文論叢	二松学舎大学	2003.3
木村瑞夫	中島敦『名人伝』論――精神と形――	論攷　中島敦	和泉書院	2003.9
渡辺一民	華々しき登場	中島敦論	みすず書房	2005.3
閻瑜	「行動者」になった「悟浄」：『わが西遊記』との関連性から読む「名人伝」	大妻女子大學大學院文學研究科論集	大妻女子大学	2007.3
山口理沙	「守破離」試論、師弟関係論:中島敦『名人傳』に問う	教育研究	青山学院大学	2008
郭　勇	“越境”与“虚無”――論中島敦『名人伝』	解放軍外国語学院学報	解放軍外国語学院	2006.11
孫立成	中島敦『名人伝』互文性解読	作家雑誌	吉林省作家協会	2011.10